

高野山大学論叢 第33巻 拡刷  
平成10年(1998)2月 印刷

「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」第14番の概要

森 雅 秀

# 「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」第14番の概要

森 雅 秀

## はじめに

15世紀のはじめにチベットのツァン地方で、45種類のマンダラを14幅のタンカに描いたマンダラ集が製作された。サキヤ派の高僧ゴルチエン・クンガ・サンポ(Ngor chen Kun dga' bzang po)が、1429年に完成したゴル寺の堂内を飾るために、ネパールから6人の絵師を呼び寄せて描かせたことが伝えられている。クンガ・サンポの師のひとりであるマティパンチエン・ササン・パクバ(Ma ti pan chen Sa bzang 'phags pa)の追悼の意も込めて制作された。14幅の中のいくつかの作品の上端に、セットの中の順序を示すために「ヴァジュラーヴァリーの第～番の絵画」(rdo rje 'phren ba'i ras bris～)という銘文が記されていることから、この作品を「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」と呼ぶことにしよう。

『ヴァジュラーヴァリー』(*Vajrāvali*)とはインド後期密教を代表する学僧アバヤカラグプタ(Abhayākaragupta)が著したマンダラ儀軌書である(Mori 1997)。アバヤカラグプタはこの書の中で20数種のマンダラの制作方法と、それを用いた儀式であるアビシェーカ(abhiṣeka, 灌頂)とプラティシュタ( pratisthā)を解説している。同書と密接な関係を持つ文献『ニシュパンナ・ヨーガーヴァリー』(*Niśpannayogāvalī*)には、『ヴァジュラーヴァリー』と同じマンダラの観想法が説かれている。「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」に描かれているのは、これらのマンダラをさらに細分化した42種に、『阿闍梨所作集成』(*Ācārya-kriyāsamuccaya*)に説かれた3種のマンダラを加えた45種である。『阿闍梨所作集成』はダルパナ(Darpaṇa)に帰せられる大部の儀軌であるが、『ヴァジュラーヴァリー』や『ニシュパンナ・ヨーガーヴァリー』などのアバヤカラグプタの著作やその他の儀軌を合揉した、オムニバス的な性格を持つ儀礼文献で、とくにネパールで広く流布した。

「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」は、これら45種のマンダラを14幅に分けて描いている。そのため1枚にひとつのマンダラを描いた作品が4点、1枚に4種のマンダラを描いた作品が9点、そして、おそらく5種のマンダラを描いた作品が1点あったと推測される。このうち、現存しているのは第1, 2, 5, 7, 8, 9, 13, 14番の8点である。また、類似の標題が与えられている「時輪マンダラ」が伝えられているが、様式や銘文から明らかに制作年代は下り、おそらくオリジナルの流れを汲む模品と考えられる。これには11という順番が与えられている。現存する8点のうち、第5番と第9番の2点は画面の構成が他の作品と異なることから、同一の内容を

持つ別のヴァージョンに属する可能性も否定できない。ただし、残りの6点のあいだにも表現法や様式に微妙な差異があることや、制作にあたったのが単独の絵師ではなく6人いたこと、また、8点のあいだに重複した内容のことなどを考慮に入れて、同一時期のオリジナルのヴァージョンの一部であって、画面構成の違いは単に絵師が異なるためと現在のところ考えている。

1997年の2月から8月にかけて、国内3箇所で開催された「チベット密教美術展」において、「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」の中の1点がわが国においてもはじめて公開された（リー、サーマン監修 1997：P1.83）。出品されたのはシリーズの末尾におかれる第14番の作品で、五守護（Pañcarakṣā）、ヴァスダーラー（Vasudhārā）、グラハマートリカ（Grahamātṛkā）、仏頂尊勝（Uṣṇīśavijayā）の4種のマンダラが描かれている。このうち、五守護マンダラのみは『ヴァジュラーヴァリー』に説かれるが、残りの三つは『阿闍梨所作所成』から加えられた3種のマンダラである。所作タントラの階梯に含まれる四種のマンダラがまとめられているのである。

この小論は1997年6月に山口県立美術館において行った本作品の調査報告で、作品の概要の紹介、銘文の転写、そしてマンダラに含まれる尊名の比定を主たる目的とする。調査にあたっては山口県立美術館の方々にご協力いただいたことを明記し、謝意を表したい。なお、「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」の全体像と、インドからチベットにマンダラが伝えられる過程での本作品の持つ意義については、『美術史』第145冊所収の拙稿「ツインマーマン・コレクションの『ヴァジュラーヴァリー四曼荼羅』」において詳しく述べたので、あわせて参照されたい。

### 全体像

「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」第14番は、チベット佛教美術の世界有数のコレクションであるツインマーマン・ファミリー・コレクションに含まれている。縦89.0cm、横73.7cmの綿布のキャンバス地に顔料絵の具で着色されている。尊像やマンダラの細部まで克明に描かれ、剥落や破損もほとんど見られないが、例外的に下端の右端が約3cmにわたって絵の具が剥落し、下の綿布が現れている。また上端中央部に縦の折り目がつき、それを中心に若干の破損がある。

全体は同じ大きさの4つのマンダラで構成されている（図1）。そして、余白を埋めるように大小あわせて41の円形の区画を描き、それぞれに1尊ずつの尊格を描く。ただし、中央の大きな円の上の部分には、尊格ではなく僧形の人物が描かれている。さらに画面の上下に横長の区画を作り、それぞれに16体ずつの尊像を置く。ここでも下段の右端の人物は尊格ではなく僧侶の姿となる。上下の各尊はニッチ状の建造物の中に描かれ、仕切の柱の上部には小さな仏塔の姿も描かれる。

主要な4つのマンダラについてはあとで詳しく述べることにして、これらの周囲の尊格の尊名をはじめに示そう。この作品にはいくつかの銘文があるが、その大半は尊名の書き込みである。

上段の16尊のうち、左からの5尊には順に阿閦、大日、宝生、阿弥陀、不空成就の五仏の名が記されている。印相、身色は通常の金剛界の五仏と同じである。6番目の仏は釈迦牟尼である。つづく第7番目の仏の上には「十方仏」と記されるが、これは残りの10尊のグループ全体を示している。十方仏の各尊の上には尊名ではなく、東南西北、北東、東南、南西、西北、上下の順に方向が記入されている。いずれも転法輪印を結び、黄色と赤の身色が交互に現れる(図2)。

下段については右端の人物を除く15尊はヒンドゥー教の神々である(図3)。左から順にインドラ(Indra, 帝釈天), ウペンドラ(Upendra), アグニ(Agni, 火天), ヤマ(Yama, 夜摩), ラークシャス(Rākṣas, 羅刹), ヴァルナ(Varuṇa, 水天), ヴァーユ(Vāyu, 風天), ヤクシャ(Yakṣa, 夜叉), ガネーシャ(Ganeśa), イーシャーナ(Īśāna), スーリヤ(Sūrya, 日天), チャンドラ(Candra, 月天), ブラフマン(Brahman, 梵天), ヴェーマチトリーン(Vemacitrin), プリティヴィーデーヴァター(Pr̥thivīdevatā, 地天)である。それぞれヒンドゥー因像学の伝統にしたがった姿で描かれている。最後の人物は上部には銘文がないが、後述するように、画面全体の下端に比丘クンガ・サンポという人名が見えることから、本作品の制作に関与したゴルチェン・クンガ・サンポと比定される。

これ以外の尊名の書き込みとしては、画面全体の中央にやや大きく描かれた四面八臂の女尊に大隨求明妃と、さらにその四方で各辺の中央に置かれた同じ大きさの4つの円の中の女尊に大千摧碎明妃(下), 密呪隨持明妃(上), 大寒林明妃(右), 大孔雀明妃(左)という尊名が記されている(図4)。これらの5尊は左上のマンダラにも含まれる五守護である。

中央の大隨求明妃の上の小さな円の中の僧形の人物には「ジュニヤーナドヴァジャ」というサンスクリットの人名が記されている。名前はインド人を予想させるが、僧衣はチベット風で、おそらく「イェーシェー・ゲルツェン」という名称をインド式に読んだのであろう。

このほかに、画面全体の右下と左下にいずれも同じく「三十五仏」と書かれている。これは五守護とジュニヤーナドヴァジャを除く35の小さな円に描かれた仏たちを指す。ただし、書き込みは「三十五仏」とあるだけで個々の名称は記されず、尊容は金剛界の五仏と同じ印と身色の組み合わせの5種類があらわれるだけであるため、尊名は比定し得ない。

尊名以外の銘文では、上端の中央に「ヴァジュラーヴァリーの第14番目の絵画、幸あれ」と記されている。これは作品の標題に相当し、すでに述べたようにサンスクリットのマンダラ儀軌書『ヴァジュラーヴァリー』にもとづいたマンダラ集の第14番目に相当することを示している。「幸あれ」という語は「ヴァジュラーヴァリー・マンダラ集」の現存する作品の中ではこの作品にのみ含まれ、シリーズの最後に位置づけられることを示唆している。

下段の中央には「吉祥なる師ササン・パクバの御心の思いが満たされますように」と書かれ、ササン・パクバの追善のためにこの作品が制作されたことを示している。また同じ下端の右端には、「比丘クンガ・サンポ」という人名を含む銘文があるが、後半部分は剥落していて解読でき

ない。

下段の左端にはマントラが記されている。「オーム、よく安置された金剛よ、スヴァーハー」「オーム、すべての知識よ、スヴァーハー」と読める。これらのマントラはインドの密教徒が行った仏像の安置式や寺院の落慶式において用いられるマントラで、チベット仏教でも受け継がれた。この作品がいわゆる開眼供養を受けていることを示すものだが、作品の内容には直接の関係はない。

#### 四種のマンダラ

つぎに、中心となる4つのマンダラを詳しく見ていく。これらのマンダラは左上が五守護(図9)、右上がヴァスダーラー(図10)、左下がグラハマートリカ(図11)、右下が仏頂尊勝のマンダラ(図12)である。関連する文献を参照しながら各マンダラを構成する尊格を概観しよう。

左上の五守護マンダラは、すでにあげた大隨求明妃以下の5尊が中央と四方に配される。いずれも八弁の蓮華の中に描く。このマンダラにはさらに8尊の女尊が含まれる。すなわち、楼閣の四隅にカーリー、カーララートリ、カーラカンティー、マハーヤシャーの四人のヒンドゥーの女神を、四門には鉤索鎖輪の4人の門衛を置く。このうち四門衛は金剛界マンダラの四摂菩薩に相当するが、女尊のマンダラにふさわしく、金剛鉤女などの女尊に変更されている(図5)。

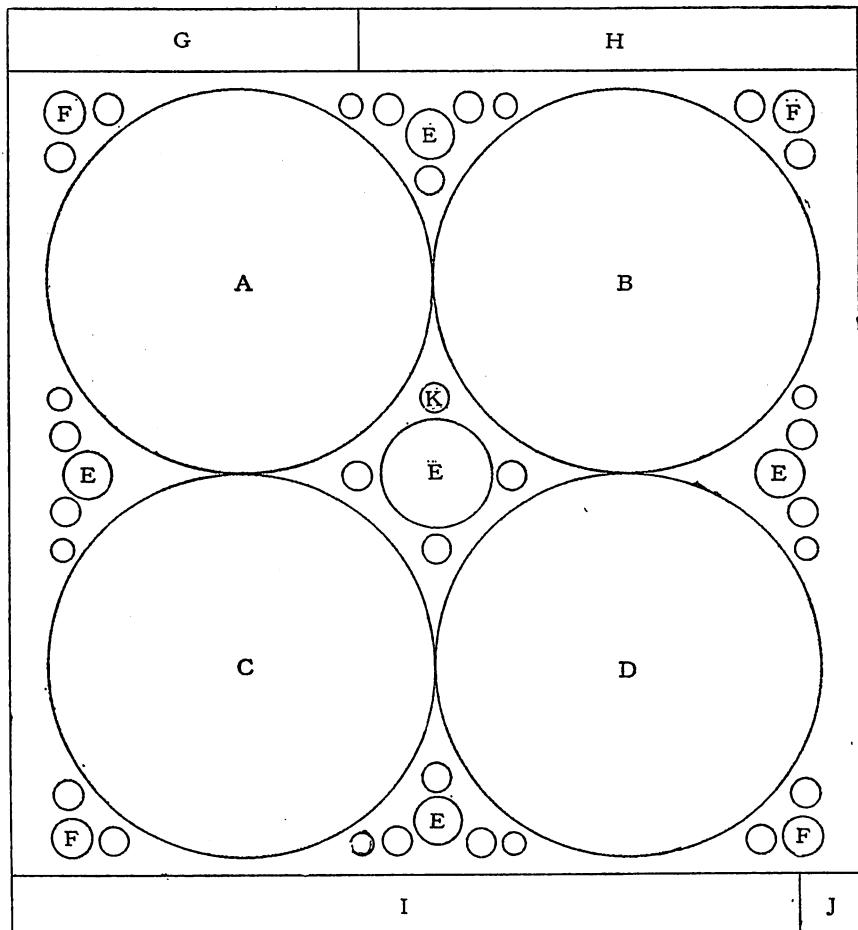
右上のヴァスダーラーを中心とするマンダラは19尊で構成される。中尊のヴァスダーラーは豊穣を司る女神で、インドやネパールにおいて人気が高く、作例も豊富である。ここでは六臂をそなえた姿で表現され、このうちの二臂には宝の壺と穀物の穂を持ち、富と豊穣の女神として表される。ヴァスダーラーの西には持金剛、觀自在、金剛手、東には2人の女尊とバドラと呼ばれる男尊がそれぞれ一列に並ぶ。これら6尊で第一重は構成され、南北には尊格は描かない独特の配列を取る。第二重は4尊のみで、四隅に置かれる。4尊にはチヴィクンダリンなどの夜叉の王の名があげられている。第三重は四隅に4人の女神、四方にはふたたび夜叉の王が4尊置かれている(図6)。この作品では第一重と第二重の区別が明確ではなく、隣り合って描かれている。ヴァスダーラー・マンダラの作例はネパールにおいて豊富で、Pal(1974: Pls. 97-99; 1985: Pl. 17)にも見られるが、そこでは三重が儀軌どおりに描かれている。

左下のグラハマートリカ・マンダラでは、マンダラの名称となっているグラハマートリカはマンダラの中央ではなく、北西の隅に置かれ、中央はスーリヤが占めている。グラハとは惑星を示す語で、人間の運命を左右すると考えられた。インドの占星術ではスーリヤ以下の九つのグラハが占める位置で吉凶が占われ、その伝統はネパールでも継承された。そして、このグラハを支配する女神がグラハマートリカである。マンダラはスーリヤを中心にして、その他の8つのグラハが八葉の蓮弁に描かれる。月、火星から土星までの惑星、日蝕と月蝕の神ラーフ、そして彗星ケートゥで構成される。この四方には東から順に仏世尊、金剛手、世自在、文殊が描かれて

いる。楼閣の四隅にはすでにあげた北西のグラハマートリカーベのぞき、いずれも複数の尊格からなるグループが置かれる。このうち、北東には「すべてのグラハ」が描かれる。中央の9尊と同一の神々であるが、尊容は中央のものとは異なり半裸である。またケートゥが含まれていない。南西には28尊からなる星宿神、すなわち二八宿が4列にならぶ。身体の色が異なるだけで、いずれも合掌した姿で描かれる。南東は「すべての災厄」と呼ばれる4尊のグループであるが、個々の名称は文献にはあげられていない。これらの外側の楼閣の門には四天王、すなわち持国天、増長天、広目天、多聞天がおかれ、マンダラ全体は58尊で構成される（図7）。

最後の右下のマンダラは仏頂尊勝のマンダラで32尊からなる。中尊を取り囲む8尊は、さまざまな名称を冠した仏頂尊（uṣṇīṣa）で、車輪をモチーフとした区画にシンメトリカルに配される。その周囲には16弁の蓮華が描かれ、やはり仏頂尊が置かれる。これら16尊は16種類の「空」から生じた仏頂尊である。大乗仏教の基本的概念である「空」に18種類を数えた18空のうちの16種が名称に含まれる。たとえばはじめにあげられる東の尊格は「内空から生じた仏頂」（adhy-ātmaśūnyatodaya-uṣṇīṣa）という名称を持つ。さらにその外側には8尊の女尊が置かれる。このうち四方の4尊は尊名の最後に「尊勝」（vijayā）ということばを含むが、これも中尊の尊名の仏頂尊勝にならったものであろう（図8）。

女尊を中心とするこれらの4種のマンダラは、内部に含まれる尊格や配色はそれぞれ異なるが、いずれも同一の大きさを持ち、まったく同じように描かれている。楼閣の構造やそのまわりに描かれる装飾品、宝石、傘蓋などはいずれも共通である。この作品の標題にあげられる『ヴァジュラーヴァリー』にはマンダラの構造に関する記述も豊富であるが、ここに描かれたマンダラの姿は同書の説明にほぼ正確に一致する（森 1997）。このようなマンダラの形態はラダック地方に見られるような初期のチベットのマンダラでは確立していないが、その後のチベットで描かれたマンダラの標準的な姿である。



A	五守護マンダラ	G	五仏と釈迦
B	ヴァスダーラー・マンダラ	H	十方仏
C	グラハマートリカ・マンダラ	I	ヒンドゥー教の神々
D	仏頂尊勝マンダラ	J	クンガ・サンポ
E	五守護	K	ジュニャーナドヴァジャ
F	三十五仏（無印の円を含む）		

図1 全体の構成

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----

1	mi skyod pa (阿閦)	9	nub (西)
2	rnam snang (大日)	10	byang (北)
3	rin 'byung (宝生)	11	byáng shar (北東)
4	'od dpag med (阿弥陀)	12	shar lho (南東)
5	don grub (不空成就)	13	lho nub (南西)
6	shākya thub pa (釈迦牟尼)	14	nub byang (西北)
7	phyogs bcu'i sangs rgyas (十方仏)	15	sten (上)
	shar (東)	16	'og (下)
8	lho (南)		

図2 上段の16尊の銘文

17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--

17	brgya byin (インドラ, 帝釈天)	25	tshogs bdag (ガネーシャ)
18	nye dbang (ウペーンドラ)	26	dbang ldan (イーシャーナ)
19	me lha (アグニ, 火天)	27	nyi ma (スーリヤ, 日天)
20	bshin rje (ヤマ, 夜摩)	28	zla ba (チャンドラ, 月天)
21	srin po (ラークシャス, 羅刹)	29	tshangs pa (プラフマン, 梵天)
22	chu lha (ヴァルナ, 水天)	30	thag bzang ris (ヴェーマチトリン)
23	rlung lha (ヴァーネ, 風天)	31	sa'i lha mo (ブリティヴィーデーヴァ
24	gnod sbyin (ヤクシャ, 夜叉)		ター, 地天)

図3 下段の15尊の銘文

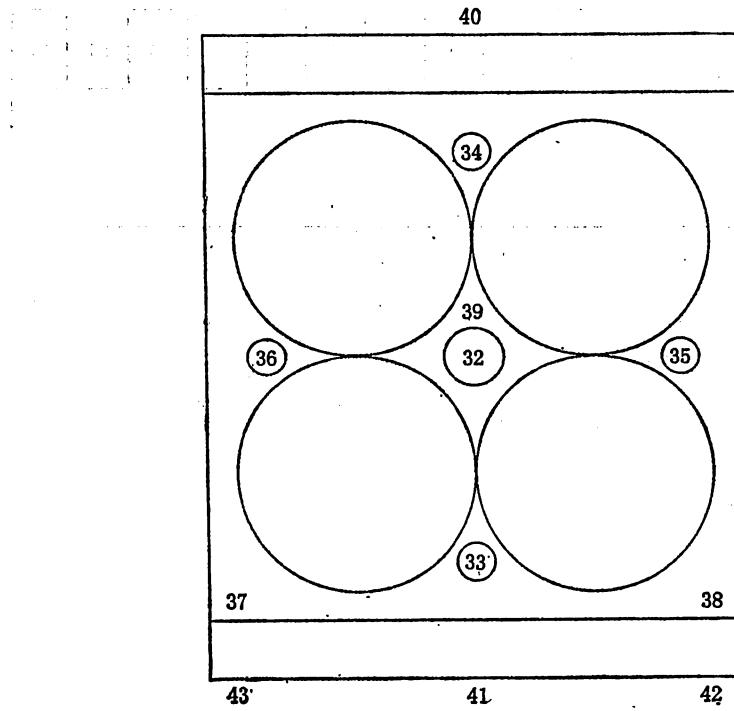
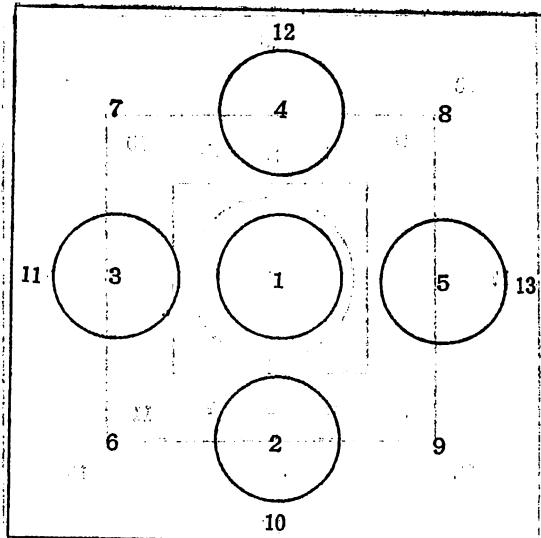


図4 マンダラの周囲, 上端, 下端の銘文



#### 中央と四方

1 Mahāpratisarā	So sor 'brang ma chen mo	大隨求明妃
2 Mahāśāhasrapramardanī	sTong chen mo rab 'jom ma	大千摧碎明妃
3 Mahāmantrānusāriṇī	gSang sngags rjes su 'dzin pa chen mo	密呪隨持明妃
4 Mahāśitavatī	bSil ba'i tshal chen mo	大寒林明妃
5 Mahāmāyūri	rMa bya chen mo	大孔雀明妃

#### 四隅

6 Kāli	Nag mo
7 Kālarātri	Dus mtshan mo
8 Kālakarṇī	rNa ba nag mo
9 Mahāyaśā, Śvetā	dKar mo

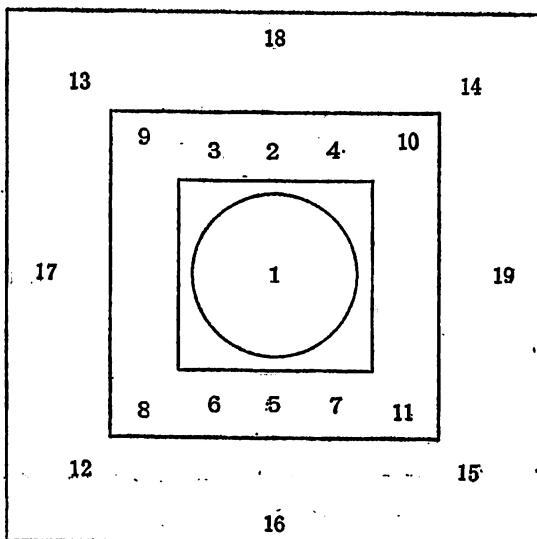
#### 四門

10 Vajrāṅkuśī	rDo rje lcags kyu ma	金剛鉤女
11 Vajrapāśī	rDo rje zhags pa ma	金剛索女
12 Vajrasphoṭā	rDo rje lcags sgrog ma	金剛鎖女
13 Vajrāveśī, Vajraghaṇṭā	rDo rje dril bu ma	金剛鈴女

Skt: *Niśpannayogāvalī*, Bhattacharyya 1972: 42-3; *Vajrāvalī*, Lokesh Chandra 1977b: 120.7-121.3.

Tib: *Niśpannayogāvalī*, Tibetan Tripitaka, the Peking edition, Vol.80, No.3962, 137.5.6-138.3.3; *Vajrāvalī*, No.3961, 60.3.7-61.1.6.

図5 五守護マンダラ配置図



### 第1重

1 Vasudhārā	Nor rgyun ma
2 Vajradharasāgaranirghoṣa	rDo rje 'dzin pa gya mtsho'i nges par sgrogs pa
3 Āryāvalokiteśvrara	'Phags pa spyan ras gzigs dbang phyug
4 Vajrapāṇi	Phyag na rdo rje
5 Ilādevī sarvopakaraṇādhikā	I lā nye bar mgo ba thams cad la dbang byed pa
6 Varunorāsādhikārī	Chu bdag ro bcud la dbang byed pa
7 Bhadra	Dzambhala

### 第2重

8 Civikundalin	Tsi vi ku n̄da li
9 Kelimāli	Kelimāli
10 Mukhendra	sGo'i dbang po
11 Carendra	sPyod pa'i dbang po

### 第3重

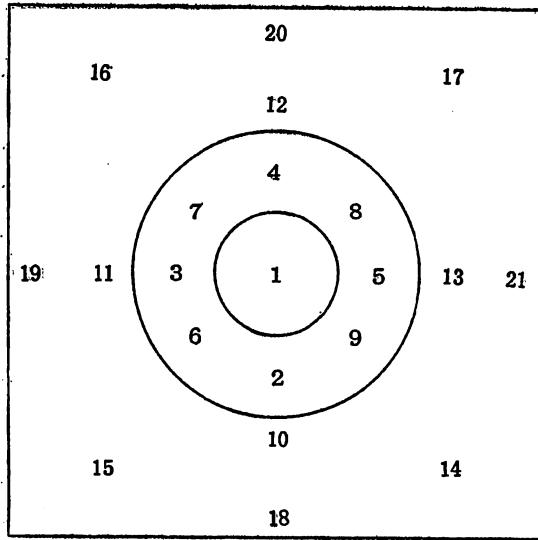
12 Guptā Devī	sBas pa'i lha mo
13 Suguptā Devī	Shin tu sbas pa'i lha mo
14 Sarasvatī Devī	lHa mo dbyangs can ma
15 Candrakāntā Devī	Zla ba chu shil gyi lha mo
16 Pūrṇabhadra	Gang bzang po
17 Māṇibhadra	Nor bu bzang po
18 Dhanadā	Nor sbyin
19 Vaiśravaṇa	rNam thos sras

毘沙門天

Skt: *Ācāryakriyāsamuccaya*, Lokesh Chandra 1977a: 433.1-436.5.

Tib: *Ācāryakriyāsamuccaya*, Tibetan Tripitaka, the Peking edition, Vol.86, No. 5012, 311.2-311.5.

図6 ヴァスター・マンダラ配置図



#### 中央の蓮華

1 Bhāskara	1Ha nyi ma	日天
2 Soma	Zla ba	月天
3 Maṅgala	bKra shis	火星
4 Budha	gZa' lhag tu grags pa	水星
5 Br̥haspati	Phur bu	木星
6 Śukra	Pa sangs	金星
7 Śanaiśvara	sBen pa	土星
8 Rāhu	sGra gcan	羅睺
9 Ketu	mJug rings	計都

#### 蓮弁の四方

10 Buddha-Bhagavat	Sangs rgyas bcom ldan 'das	仏世尊
11 Vajrapāni	Phyag na rdo rje	金剛手
12 Lokeśvara	'Jig rten dbang phyug	世自在
13 Mañjuśrī	'Jam dpal gzhon nu	文殊

#### 四隅

14 Sarvagraha	gZa' thams cad	曜
15 Sarvanakṣatra	Gyu skar thams cad	星宿
16 Sarvopadrava	Nye bar 'che bar pen pa thams cad	
17 Bhaṭṭārikā Mahāvidyā	rJe btsun ma rig pa chen po	

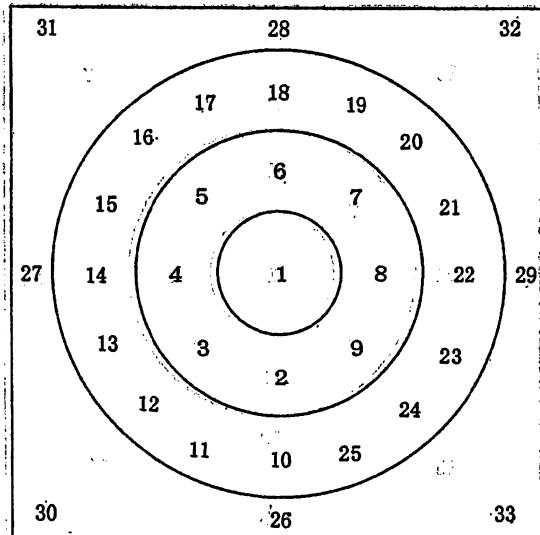
#### 四門

18 Dhṛtarāṣṭra	Yul 'khor skyong	地国天
19 Virūṭaka	'Phags skyes po	增長天
20 Virūpakṣa	sPyan mi bzang	広目天
21 Kubera	Lus ngan po	多聞天

Skt: *Ācāryakriyāsamuccaya*, Lokesh Chandra 1977a: 427.3-433.1

Tib: *Ācāryakriyāsamuccaya*, Tibetan Tripitaka, the Peking edition, Vol.86, No. 5012, 310.1-311.2.

図7 グラハマートリカ・マンダラ配置図



#### 中央の八幅輪

- 1 Prakṛtiigarbhā-udayoṣṇīṣa
- 2 Gaganasannibhā-udayoṣṇīṣa
- 3 Kṣitigarbhā-udayoṣṇīṣa
- 4 Maṇigarbhā-udayoṣṇīṣa
- 5 Rajogarbha-udayoṣṇīṣa
- 6 Amitagarbhā-udayoṣṇīṣa
- 7 Tejogarbha-udayoṣṇīṣa
- 8 Dūḍubhisvara-udayoṣṇīṣa
- 9 Samiraṇa?-udayoṣṇīṣa

Rang bzhin nam rnam par rgyas pa'i gtsug tor  
 Nam mkha' dang mnyam pa las byung ba'i gtsug tor  
 Sa'i snying po las byung ba'i gtsug tor  
 Nor bu'i snying po las byung ba'i gtsug tor  
 Ro'i snying po las byung ba'i gtsug tor  
 dPag tu med pa las byung ba'i gtsug tor  
 gZi brjid snying po las byung ba'i gtsug tor  
 rNga sgra'i dbyangs las byung ba'i gtsug tor  
 Rlung gi snying po las byung ba'i gtsug tor

#### 十六葉の蓮弁

- 10 Adhyātmāśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 11 Bahirdhāśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 12 Adhyātma bahirdhāśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 13 Śūnyatāśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 14 Saṃskṛtaśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 15 Asaṃskṛtaśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 16 Atyantaśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 17 Anavarāgraśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 18 Anavakāraśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 19 Prakṛtiśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 20 Sarvadharmaśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 21 Svalakṣaṇaśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 22 Anupalambhaśūnyatā-udayoṣṇīṣa
- 23 Abhāvaśūnyatā-udayoṣṇīṣa

Nang stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 Phyi stong ba nyid las byung ba'i gtsug tor  
 Phyi nang stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 sTong pa nyid stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 'Dus byas stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 'Dus ma byas stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 mTha' las 'das pa stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 Thog ma dang mtha' ma med pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 Dor ba med pa stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 Rang bzhin stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 Chos thams cad stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 Rang gi mtshan nyid stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 Mi dmigs pa stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor  
 dNgos po med pa stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor

24	Svabhāvaśūnyatā-udayoṣṇīṣa	Ngo po nyid stong ba nyid las byung ba'i gtsug tor
25	Abhāvasvabhāvaśūnyatā-udayoṣṇīṣa	dNgos po med pa'i ngo po nyid stong pa nyid las byung ba'i gtsug tor
<b>四方</b>		
26	Vighnapraśamana-uṣṇīṣavijayā-devī	bGegs rab tu zhi bar byed pa'i lha mo rnam par rgyal ma
27	Mṛtyupraśamana-uṣṇīṣavijayādevī	'Chi ba rab tu zhi bar byed pa'i lha mo rnam par rgyal ma
28	Kleśapraśamana-uṣṇīṣavijayādevī	Nyon mongs par gtu zhi bar byed pa'i lha mo rnam par rgyal ma
29	Skandharujapraśamana-uṣṇīṣavijayādevī	Phung po'i nang zhi bar byed pa'i lha mo rnam par rgyal ma
<b>四隅</b>		
30	Vajramālāyurdātṛī	rDo rje phreng ba tshe sbyin ma
31	Mahāmāyā	sGyu 'phrul chen mo
32	Kanakaprabhā	gSer gyi 'od can ma
33	Kāmcanaṁālikāyurdātṛī	Tshe ster bar byed pa gser gyi phreng ba ma

Skt: *Ācāryakriyāsamuccaya*, Lokesh Chandra 1977a: 436.5–441.6.

Tib: *Ācāryakriyāsamuccaya*, Tibetan Tripitaka, the Peking edition, Vol.86, No.5012, 311.5–312.2.

図8 仏頂尊勝マンダラ配置図

#### 参考文献

- Bhattacharyya, B. 1972 (1949). *Nispannayogāvalī of Mahāpāṇḍita Abhayākara-gupta*. G.O.S. No.109. Baroda: Oriental Institute.
- Lokesh Chandra (reproduced) 1977a. *Kriyāsamuccaya*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 237. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Lokesh Chandra (reproduced) 1977b. *Vajrāvalī: A Sanskrit Manuscript from Nepal Containing the Ritual and Delineation of Maṇḍalas*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol.239. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Mori, M. 1997. *The Vajrāvalī of Abhayākara-gupta*. (PhD Dissertation submitted to the University of London).
- 森 雅秀 1997. 『マンダラの密教儀礼』春秋社。
- 森 雅秀 1998. 「ツィンマー・マン・コレクションの「ヴァジュラーヴァリー四曼荼羅」—チベットにおけるマンダラ伝承の一例』『美術史』145 (印刷中)。
- Pal, P.1978. *The Arts of Nepal part 2 (Painting)*. Leiden: E.J.Brill.
- Pal, P.1985. *Art of Nepal: A Catalogue of the Los Angeles County Museum of Art Collections*. Los Angeles: Los Angeles Country Museum of Art.
- リ一, M., R.サーマン監修 1997. 『天空の秘宝 チベット密教美術展』朝日新聞社。



図9 五守護マンダラ



図10 ヴァスダーラー・マンダラ



図11 グラハマートリカーマンダラ



図12 仏頂尊勝マンダラ